

研究ノート

アコリス遺跡における「豊饒の民間信仰」

—土製ヒト形小像から探る—

花坂 哲

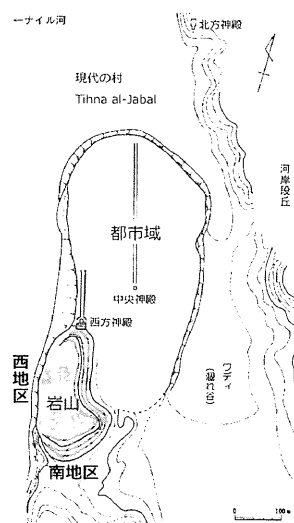
エジプト中部のアコリス遺跡で出土する土製ヒト形小像は他では類例をみない製品である。第3中間期から末期王朝時代に属するこの粗製の小像は、乳房や陰部といった性差を表す身体的特徴を持っておらず、顔の造作や装飾品などの表現も一切みられない。胴部付近に貼り付けられた丸い突起物が唯一の装飾であり、最大の特徴となっている。この突起物はヘソを表していると思われ、性差による身体的特徴がまだ現れていない乳幼児期の子供の姿を小像は象っていると考えられる。さらに、小像の頭部（顔部）は全て失われているか、残存していても半ばほどから破損した状態で出土する。これは自然の破損の結果ではなく、頭部に打撃を加えるなど

して、意図的に破壊した結果だと思われる。子供を象った小像の頭部を破壊する行為が意味するところは、死亡率の高い乳幼児期の子供の身代わりとして「死」を与える呪術行為が行われていたのではないだろうか。この小像の持つ機能は子供の死を忌むに留まらず、母親の安全な出産であり、また、家族が満足な食事ができるように穀物の豊饒や家畜の多産などの願いも同時に込めた豊饒小像であった可能性も指摘できよう。こうした呪術的行為は、伝統的な神々が介在せず、狭い範囲の地域社会でのみ行われていた民間信仰であり、そこには現世利益を望む民衆の姿が窺える。

I. はじめに

1. アコリス遺跡と調査地区の概要¹⁾ (第1図) (Akoris 1995²⁾, PR Akoris 2002-2007³⁾)

アコリス遺跡 (Akoris) は中部エジプトのナイル河東岸、耕作地と東部砂漠を隔てる石灰岩河岸段丘の麓に位置しており、石灰岩段丘が途切れて島状に取り残された、南北200m×東西50m、高さ20mほどの岩山が遺跡のランドマークとなっている。「アコリス」はヘレニズム期の名称であり、王朝時代には「美しい運河」を意味する「メル・ネフェル (Mr nfr)」と呼ばれていたが、新王国時代以降は「小山」の意味を持つ「タ・デヘネト (T3 dhnt)」の別称も持っていた (Akoris 1995: pp. 3-4)。これがランドマークとなっている「岩山」を指していると思われ、古代より人々の目を引くものであったことが窺える。岩山の北裾には中王国時代や第3中間期の岩窟祠堂やシャフト墓、ヘレニズム期の中庭や多柱室を持つ神殿 (西方神殿) などが営まれており、東裾にはヘレニズム期の岩窟墓が無数に穿たれている (Institut



第1図 アコリス遺跡地図



第2図 西地区シャフト墓遠景(俯瞰)

Français D'Archéologie Orientale du Caire 1988)。また、岩山の北側には南北 600m×東西 300m ほどの「都市域」が広がっており、表層にはヘレニズム期やコプト期の日乾レンガ建造物が残されている。本稿で取り上げる土製ヒト形小像が出土しているのは、古王国時代の墓群がある岩山西裾の「西地区」と、第3中間期から末期王朝時代の日乾レンガ建造物址などを検出する岩山南斜面一帯の「南地区」である。

西地区は現在の地上面から 10-13m ほど高い位置で、段丘が幅 5-10m ほどのテラス状をなしており、南北 180m ほどの範囲に亘って古王国時代の墓域が形成されている(第2図)。また、段丘の岸壁には中王国時代とヘレニズム期の岩窟祠堂が造られており、遠くからでも岸壁面に開口部が黒く見えている。北端にある古王国時代の岩窟マスタバ墓が規模も大きく、墓域の中心的

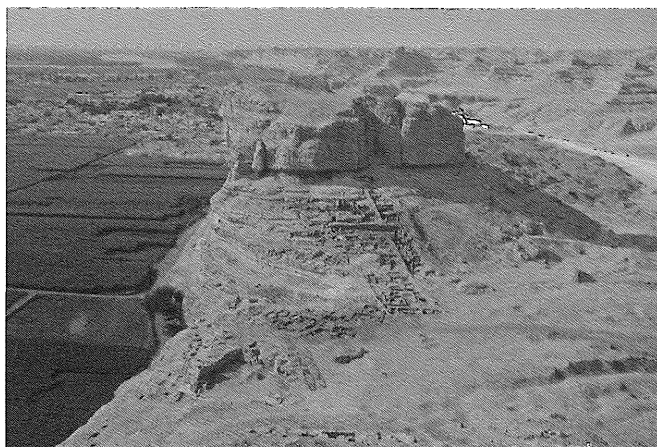
な存在であり、マスタバ西側のファサード前に造られた6基のシャフト墓をはじめ、計50基以上の小さな墓が南北に連なっている。その多くは深さ1-2mほどのシャフト墓であり、およそ1m四方の開口部を持ち、シャフトの底から水平方向に玄室が造られているものが標準的なプランとしている。シャフト墓のほかに水平方向に開口している横穴式の岩窟墓も8基確認されている。

本来は古王国時代に造営された墓域であったが、未盗掘で発見された墓はわずかであり、多くは第3中間期から末期王朝時代にかけて再利用されている。木棺や遺体が出土することから埋葬地として再利用されていたことは間違いないが、ファイアンス製の護符や装飾品のほかに、副葬品として似つかわしくない土器や木製品や石製品、また、粗製のワニ形土製品やコブラ形土製品などが出土しており、生活の場または信仰の場として再利用されていたと思われる。ちなみに、現在の地上面から段丘上へ登っていく際には、自然の段差とともに岩盤に穿たれた人工的な階段を利用することができるが、古王国時代に墓群が造営された際に造られた階段なのか、後代に再利用された際に造られたものなのかの判断はつかない。

もう一方の南地区では、2002年から2008年までの7シーズンでおよそ南北100m×東西50mの範囲で発掘調査を行っている(第3図)。斜距離50mほどの緩やかな斜面とその裾野にある平坦地が調査地となっており、そこから見上げた岩山の岩壁面には女神と双子のディオスクローイ神が刻まれたヘレニズム期の磨崖レリーフが存在している。

斜面における堆積状況は厚いところで2mほどであり、表層ではヘレニズム期およびコプト

期の遺物や日乾レンガが散見されるが、表層以下の埋土からは第3中間期から末期王朝時代に属する遺構・遺物が検出されている。斜面の遺構は寸断されており、住居構成の全体像を把握することは難しく、小さな部屋が点在する様相を示している。また、中腹に幅1.5m、



第3図 南地区発掘エリア遠景（南より）

高さ2.2mほどの大きな壁が斜面を取り巻くように東西に走っており（東西大壁）、この東西大壁の上方では比較的大きな日乾レンガ建造物が見受けられるため、公共施設があった可能性も指摘される。一方、平坦地は表土の堆積が非常に薄く、地表面から10cmほど掘り下げると第3中間期から末期王朝時代の遺構を確認できる。いずれの地点においても一般住居址や円形穀物倉庫址、パン焼き窯址などが検出されていることから居住域であったと思われるが、しかし、南地区を特徴付けているのは手工業生産に関する遺構や遺物が数多く出土する点にある。東西大壁の南側から検出された皮革工房址が特筆されるが、ガラスまたはファイアンスビーズ製作用の土製鋳型、未焼成のまま潰れてしまった土器、織物用の紡錘車などが出土している（花坂2004, 2005, 2006）。集落全体の主要な活動や居住の場は岩山の北側に広がる「都市域」であり、この南斜面は生産活動に従事する人びとの居住域、工房域であったと思われる。

なお、南地区では女性と子供を中心に20体近くの遺体も見つかっている。人形木棺や箱形木棺に入った遺体は簡単なミイラ化処理を施されたものもあるが、いずれも副葬品などは伴っておらず、非常に簡素な埋葬となっている。埋葬地となった場所に建てられていた建造物が廃棄された直後に埋葬されていたり、さらには居住が続いている床下に埋葬したと思われるものもある。いずれにせよ、南地区全体が居住域として完全に放棄された後のことではない。西地区が存在するにも関わらず、なぜ人びとの居住域内に埋葬されたのか、本稿の土製ヒト形小像の問題とは直接には関係しないが興味深い点である。

2. 問題の所在と研究目的

アコリスは中部エジプトに位置する地方集落である。古代エジプト文明の中心はメンフィス・ギザ周辺やルクソール周辺、またはアレキサンドリアであり、中部エジプトが歴史の第一面でクローズアップされたのは、新王国時代第18王朝のアクエンアテン王が一時的に都を遷した「アマルナ時代」の10年あまりのことである。中部エジプトは常に「地方」であり、こうした地方集落における一般民衆の生活は、ピラミッドや大神殿、色鮮やかな壁画、精巧な神像や王

像、貴石をあしらった壮麗な装飾品など、多くの人びとが古代エジプト文明に抱くイメージとは遠く離れた世界であったに違いない。学界における研究動向もまた、該当する発掘調査の件数が少ないこともあって、地方都市や一般民衆の生活には眼を向けることが少ないのが現状である。

本稿では中部エジプトの地方集落であったアコリス遺跡で出土した土製ヒト形小像を取り上げる。この土製ヒト形小像は遺跡の年次概報や調査隊員の論考内でわずかに触れられているだけであり（PR Akoris 2002-2007, 山花 2003, 辻村 2005）、他の遺跡からの出土例を管見では1点も知らず、その用途や分布がまったく知られていない。詳細が不明な粗製品のために「不明土製品」として扱われ、報告書に掲載されていないだけなのか、それともアコリス遺跡だけにおける特殊な出土遺物なのであろうか。

ところで、この小像が属する第3中間期から末期王朝時代だが、各地に王朝が並立し、外国人の支配を受けるなど国家の政治的な混乱を迎え、古代エジプト王朝が終焉に向かう時代とされている。しかし、当該期のアコリス遺跡の様相をみる限りでは、政治的な混乱の影響を受け、都市の人間活動が衰退しているようには感じられないのである。南地区から出土した輸入土器やタカラガイは地中海や紅海方面との活発な交易活動を感じさせ、また、皮革サンダル生産やビーズ製作などの痕跡は、官営工房から独立した独自の手工業生産が行われていたことを想像させるものである。

第3中間期や末期王朝時代は国家としては政治的な混乱期・終焉期とされるが、アコリス遺跡の出土遺構や遺物を鑑みる限り、むしろ活発な民衆の生活が垣間見える。宗教や信仰の面においても、当該期は聖獣信仰が盛んになり、各地で動物のミイラが奉納され、現世利益を求める民衆の姿が認められる。本稿では、こうした背景を持つ時代の地方集落であったアコリス遺跡で出土する土製ヒト形小像を取り上げる。これは他では類例をみない製品であるので、まずは頭部が破損していることに注目しながら考古学的特徴をまとめ、続いて地方に住む一般民衆が何を意図して小像を作り、どのように用いていたのかを明らかにすることを目的としている。

II. アコリス遺跡出土の土製ヒト形小像

1. 考古学的特徴（第4-7図、第1表）

2002年から2008年までの7シーズンの調査で合計57点の土製ヒト形小像が出土しており、内訳は西地区から11点、南地区から46点となっている。

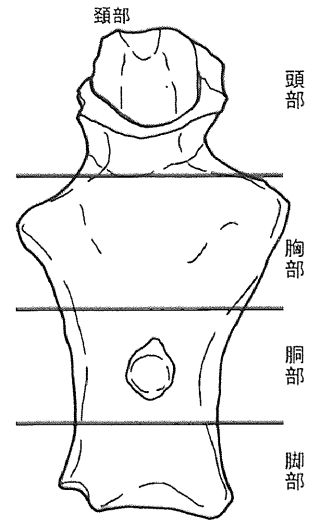
(1) 胎土

対象とする57点の土製ヒト形小像はすべてナイル・シルトと呼ばれるナイル河の泥土で作られている。これは在地産の土器やその他の土製品にも用いられているものであり、遺跡近郊で採掘されたものと思われる。胎土はわずかに白い鉱石を含んでいるが、植物などの混和物は見られない。焼成状態は良好であり、色調は赤みがかった茶褐色をしている。

(2) 形状

本稿では土製ヒト形小像の部位を頭部と身体部の大きく2つに分け、さらに身体部を胸・胴・脚部と便宜上分けて呼称することにする。

ヒト形小像は扁平な身体部から非常に短い手と足（腕と脚）が突出し、身体部に比すると大きな球状の頭部が付くものを標準的な形状とする。最大の全高を持つ製品は、高さ9.10cmに対し遺存頭部高は約2.7cmとなっており、全体の3分の1が頭部となっている。出土57点のいずれも同様の比率であり、3頭身のずんぐりとした印象を受ける。なお、身体部の形状は、胸部から脚部に向かって細くなっていく逆三角形をしたものが多いが（第5図:1など）、胴部にくびれを持つもの（第5図:7など）、胸部から脚部までが直線になった寸胴形のものなど（第6図:7など）、いくつかのヴァリエーションが認められる。



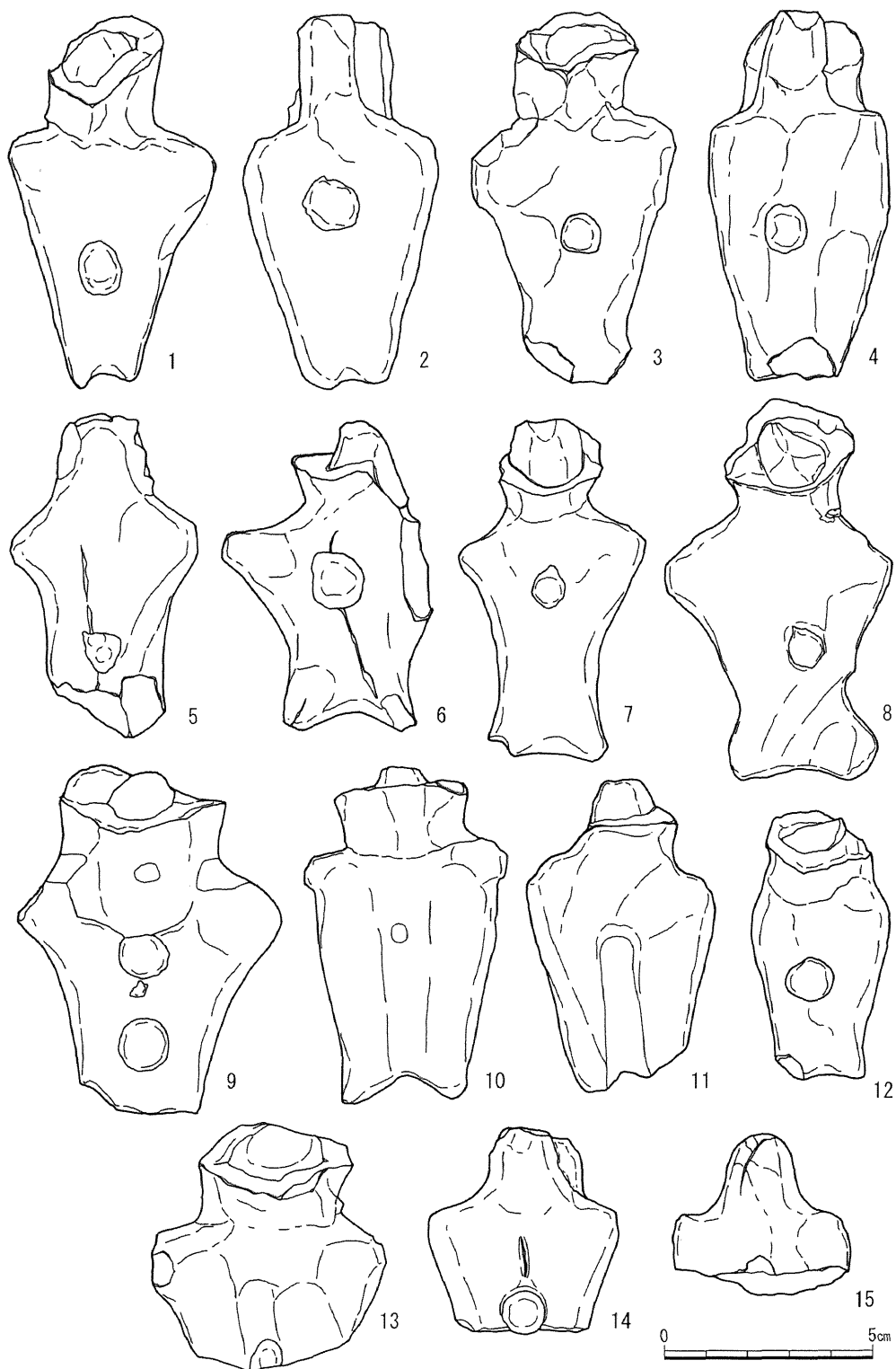
第4図
土製ヒト形小像模式図

出土した57点はいずれも頭頂部を欠くなど完形品を1点もみない。製品の高さの最大は9.10cm、最小は3.25cm、平均値は6.55cmとなっている。また、すべての製品で突出した手の両端、つまり肩幅にあたる箇所が最大幅を示しており、幅の最大は7.50cm、最小は2.89cm、平均値は4.51cmである。これらは一部の部位しか遺存していない製品も含めた値であるが、頭部から脚部までの全体がある程度確認できる24点に限ると、平均の高さは7.60cm、幅は4.46cmを測り、仮に完形品であったとしても10cm前後の大きさであったと思われる。また、後頭部側がやや膨らんだ球状の頭部を除くと身体部は薄く扁平な形状をしており、その身体部の厚みは1-2cmほどとなっている。

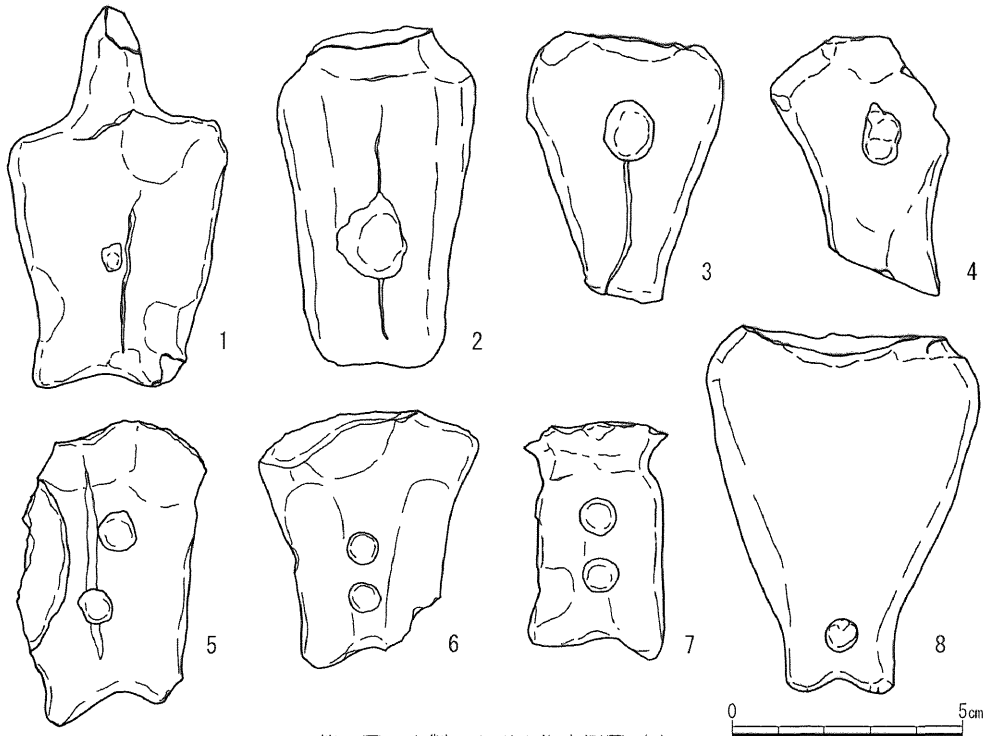
手や足は身体部を掴まみ出しただけの非常に簡略化されたものであり、なかには身体部に手足が収斂され、なで肩状になっているものや（第5図:12など）、下端部が丸みを帯びただけになっているものなどが認められる（第6図:3など）。また、ヒト形小像の性別を判断する手がかりとなる乳房や陰部などの身体的特徴は表現されておらず、頭部の一部が残っていたとしても髪の毛や顔の造作は確認できない。すなわち、明らかにヒト形をしているとはいえ、その性別を判断することはできず、老若の区別もつかないものである。

(3) 装飾

土製ヒト形小像の最大の特徴は、直径1cmほどの小さな丸い突起物が貼り付けてあることである。これは全57点中47点で認められるもので、突起物がない10点のなかには痕跡が残っているものがあり、本来はすべての製品に貼り付けてあったと思われる。47点中40点は1個だけ、6点は2個、1点は4個の突起物が貼り付けてある。身体を中心線上の胴部付近に位置するものがほとんどであるが、なかには胸部に付くものもある。2個付く製品は胸部と胴部に縦に並んでおり、突起物が4個付く製品は胸部と胴部に加えて、両手腕部の付け根に付いて



第5図 土製ヒト形小像実測図(1)



第6図 土製ヒト形小像実測図(2)

いる(第7図:2)。

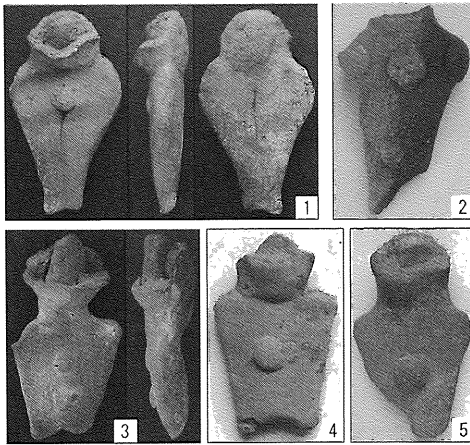
また、身体部の前面に水平の朱線が引かれている製品が6点存在し、うち4点は水平線が1本、2点はそれぞれ2本または3本となっている(第7図:1など)。その他の衣服や装飾品などは一切表現されておらず、乳房や陰部などの身体的特徴も表現されていないため、身体部中央に付いた丸い突起物が非常に目立つ存在となっている。

(4) 製作技法

土製ヒト形小像は手捏ねによって成形された中実品で、ヘラなどの工具を用いた削り痕などはほとんど見あたらず、指などによる調整・整形が行われているだけの粗雑な仕上げとなっている。

身体部から「頸部」が凸状に突き出しており、その頸部に別の粘土を巻きつけて、頭部を作り出している点に製作技法の特徴が見受けられる(第5図:4など)。これは頭部周辺が遺存している36点すべての製品において凸状の頸部を確認することができるため、製品すべてに共通する製作技法であると思われる。なお、上述したように、すべての製品で頭部の半ばほどから破損しており、目鼻や髪の毛の有無など顔の造作の詳細は明らかでない。

さらに、製作途上の痕跡とみなすべきか、装飾とみなすべきか判断しかねる溝状の線刻が17点に残されている。線刻が身体の前面にだけ残るものが1点だけあるが、残り16点は身体の両面で確認できる。指などで整形のために線が薄くなっていたり、消えたりしているものの、



第7図 土製ヒト形小像写真

線刻は身体を中心を胸部付近から脚部の端まで垂直方向に伸びている。両面に残された線刻は前後面で同じ位置にあることから、この線刻が身体部を貫いている同一のものであることが分かる。線刻が製作途上の痕跡であるならば、棒状に伸ばした粘土を2つ折りにしたか、または2つの粘土を貼り合わせた継ぎ目であると考えられる。一方で装飾とみなすのであれば、ヒト形に成形した後、何らかの理由で身体に切れ込みを入れて左右2つに割いた痕跡であると考えられよう。

2. 対象とする土製ヒト形小像の出土コンテキストおよび帰属年代

土製ヒト形小像は西地区から11点、南地区から46点の合計57点を数える。

西地区では古王国時代に造営された墓群が第3中間期から末期王朝時代に再利用されており、11点はいずれも再利用後の埋土から出土している。墓域の北端に穿たれた岩窟マスタバ墓は、南・北・西側を1-2mほど掘り下げて、岩盤から切り離すような形状となっている。マスタバ墓は南北10mほどの大きさで、上面には2基のシャフト墓が南北に並び（北シャフト・南シャフト）、また、北面に入口を持つ岩窟チャペルが造られている。なお、チャペル内の西壁にはマスタバ上面のシャフト墓に対応するように2つの「偽扉 (False door)」が刻まれている。この墓域の中心的存在ともいえる岩窟マスタバ墓周辺から4点のヒト形小像が出土しており、その内訳はチャペル入口に向かう墓道から1点、ファサード前のシャフト墓から1点、マスタバ上面に造られた北シャフトから2点となっている。

墓道は再利用された際に日乾レンガで3つに区画され、そこから木製農具や土器などが、また、ファサード前に並んだシャフト墓からは猫のミイラが、それぞれ出土している。北シャフトは開口部こそ1.1m四方と大きくはないが、深さは5.0mほどあり、シャフトの底に大きな玄室を伴っている。人骨等は見つかっておらず、シャフトや玄室を埋めた埋土から土製コブラ形製品や未焼成の土製厨子形製品などが出土している。西地区は生活の場として再利用された可能性を残しているが、日乾レンガの堆積や炉址などは検出されておらず、ここに挙げた出土遺物はいずれも信仰の場として再利用された際の献納品と思われる。

また、岩窟マスタバ墓周辺の4点以外には、中王国時代の岩窟祠堂前のテラス埋土から2点、横穴式の岩窟墓から2点の出土を数えるが、西地区の墓域のほとんどを占めるシャフト墓からは計3点しか出土していない。横穴式の岩窟墓の入り口前に動物骨が積まれていた例があり、さらに、岩窟マスタバ墓や祠堂は西地区において非常に目立つ存在であることを考えると、ヒト形小像が出土した箇所は埋葬場所や居住場所として再利用したのではなく、信仰の対象もし

くは儀礼を執り行う場所となっていた可能性が考えられる。つまり、ヒト形小像は何らかの願いや祈りを込めて作られた製品であったといえる。

一方、46点を出土している南地区は斜面上方よりA区、B…K区と調査区が設定されている。A区からE区までが斜面にあたり、F区とG区あたりで傾斜が緩やかとなり、H区以降は平坦地となっている。現在のところその東端は確認していないが、斜面を上下に区切るように東西大壁がC区とD区の境界に位置している。東西大壁の上方、下方、または平坦地に関わらず、住居址や穀物倉庫址などが検出され、手工業製品に関する遺構や遺物が点在している。表層の一部で後代のヘレニズム期やコプト期のものが見受けられるが、ほとんどが新王国時代後半から末期王朝時代前半（第20王朝から第26王朝）に属している。南地区における人間活動の中心は第3中間期であり、出土している土製ヒト形小像も同時期に帰属するものと考えて良いだろう。

遺構や供伴遺物の性格に関わらず調査区一帯から土製ヒト形小像が出土しているが、建造物の床や壁龕からではなく、いずれも埋土中から見つかっており、ヒト形小像と出土遺構の相関関係は不明である。また、埋葬された遺体に伴って出土するわけでもない。明確な出土コンテクストが判断できない点は、ヒト形小像の機能を考える上で重要な情報を欠くことになり非常に残念なことである。しかし、南地区の47点のうち39点がB区からF区までの斜面から、8点がI区からK区の平坦地から出土していることは興味深い点である。

南地区の主要な活動年代である第3中間期より後代の遺構ではあるが、岸壁にあるヘレニズム期の磨崖レリーフに刻まれた神々に献納したと思われる動物骨がA区の岩盤上に散乱していた。また、周辺の岩盤を削って階段が造られており、礼拝・儀礼のための区域が設けられていたことが窺える。さらに、斜面の最上方の岩盤には、深さが10mほどの非常に大きなシャフト墓が口を開けており、シャフト内部の岩面の加工痕を見る限り中王国時代までさかのぼる可能性を持っている。西地区の岩窟マスタバ墓や中王国時代の祠堂などの周辺が信仰の対象となり、儀礼の場として再利用された可能性を上述したが、この南地区においても大きなシャフト墓が信仰の対象となっていた可能性もあるだろう。

ちなみに、現代においても、週末の金曜日になると近隣住民が岩山北裾にある祠堂に妊娠祈願のために希求に訪れる姿を毎週のように見かけることができる⁴⁾。遺跡内には妊娠や病氣治癒を願って人びとが訪れる場所がいくつかあり、南地区のヘレニズム期の磨崖レリーフの真下の岩場や周辺もその1つとなっている。希求に訪れる住民たちはイスラム教徒やコプト教徒であり、「信仰」や「祈願」といった表現は適当ではなく、彼らの行動は慣習的なことかもしれないが、何らかの効果を期待して訪れていることは間違いない。ヘレニズム期や現代における信仰の対象地としての根源が、第3中間期までさかのぼることは大いに考えられよう。

第3中間期にも、岩場に何らかの信仰の場所や儀礼を執り行う一画が存在し、それらと関連するものとしてヒト形小像が用いられていたと思われる。ヒト形小像が斜面上方から多く出土している点、出土遺構との関連性が不明瞭である点、原位置を保っておらず埋土中から見つか

る点などは、本来斜面の上方に存在した信仰の場に献納されたヒト形小像が下方に流された結果である、とすることで説明できるのではないだろうか。

3. 破壊の行為—意図的か否か—

アコリス遺跡で出土する土製ヒト形小像の大きな特徴として、頭部（顔部）が破損している点が挙げられる。頭部が遺存している36点のうち、6点で頭部に巻き付けた粘土が完全に剥がれ落ちて頸部が剥き出しになっており、残り30点においても、半ばほどで破損しており凸状の頸部が顔を覗かせている。

さて、頭部に巻き付けた粘土が半ばほどから破損していることは、使用中の破損、経年変化、埋没中の圧力の影響といった、自然に引き起こされた結果であるのか、それとも人為的に壊された結果なのであろうか。ヒト形小像の「破損」「破壊」に関しては、メソポタミアや東地中海域で出土する小像でもたびたび取り上げられる問題であり、意図的な破壊行為があったならば、その行為に込めた意味も含め議論される問題である。

クレッター (R. Kletter) はレヴァント地域で出土する前1千年紀の「ユダ式柱状土偶 (Judean Pillar Figurines)」⁵⁾ を取り上げて、その破損について論じている (Kletter 2001)。その中で、多くの研究者が破損した状態で出土する小像を「意図的に破壊された」と考えているが、300点以上の小像をクレッターが観察した結果、意図的な破壊行為の痕跡を見出すことができなかったという⁶⁾。また、もし意図的に破壊行為が行われていたのであれば、打ち欠くための打点ポイントが残るであろうが、そうした痕跡も見当たらず、偶然か故意の破損であるのかを判断することは難しいらしい。さらに、高いところから落下したり、埋土中の圧力によっても破損する可能性は大いにあるとし、レプリカによる落下実験を行っている。その結果、地面にぶつかる箇所によっても壊れ方が異なり、壊れやすい箇所は腕、首、胴体、鼻と続くという⁷⁾。クレッターは小像を象徴的に「殺す」ことによって、現実世界への影響を打ち消そうとする行為はさまざまな時代や社会に見ることができ、なかでも頭部や顔部は重要な意味を持っていたとする。しかし、対象とした柱状土偶は頭部や顔部ばかりが壊れているようなことはなく、この土偶の破損は意図的なものではなく、偶然壊れたものであると結論付けている。

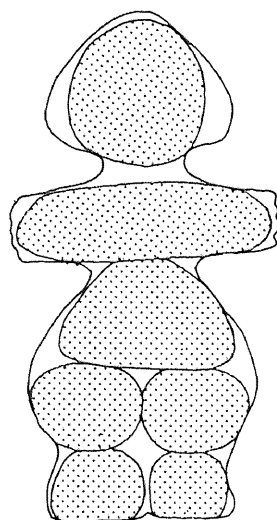
また、トルコのチャタルフユック遺跡 (Çatal Höyük) から出土した新石器時代の女性像に関して、研究対象とした42点のうち19点が頭部を欠いており、その破損した頭部が出土していないことに丹司正子は着目している。この女性像は妊婦の姿を表しており、食糧不足に対応して人口増加を抑えるため、女性の出産能力を断つために妊婦を模した像の頭部を破壊したと推論を立てている (丹司 1983)。さらに、日本の縄文土偶研究においても、土偶を意図的に壊したか否かという議論が交わされている。水野正好や小林達雄など土偶を意図的に壊したと考える研究者も多く (水野 1997, 小林 1997 など)、さらに、意図的な行為であったことを補完する証拠として、頭・腕・胴・脚などを部位ごとに作り接合する「分割塊製作法」が小野正文によって提唱されている (小野 1984) (第8図)。土偶を破壊する行為に関して吉田敦彦は、土偶

の破片を大地の再生や豊饒を願って各所に撒くという儀礼があったとし、「ハイヌウェレ神話」や記紀にある食物起源の記述と結びつけて論じている（吉田 1986）。一方、藤沼邦彦はアスファルトで補修した痕跡が残る土偶の存在を示し、さらに破損箇所についても、首や手足の付け根などの突出部や接合部、または加重がかかる構造的に弱い箇所で壊れていると述べ、土偶は故意に壊されたものではないとの立場をとっている（藤沼 1997）。

このように小像が意図的に破壊されたのか否かという問題は、地域や時代を問わずヒト形小像には常に付随する研究テーマとなっているのだが、ここで再びアコリス遺跡で出土した土製ヒト形小像が意図的に破壊されたのか否かを考えてみたい。研究対象とした全 57 点の製品に完形のものはなく、すべて破損した状態で出土している。壊れやすいとされる手足の先端などは、出土製品のほとんどで欠けていたり剥離していたりするが、こうした破損や剥離はヒト形小像に限ったことではなく、動物形土製品やその他の土製品についても同様であろう。それでは、大きく破損している箇所は限定できるのだろうか。

土製ヒト形小像を頭部と胸・胴・脚部（あわせて身体部）の 4 つの部位に分け、部位の組み合わせによる遺存または破損の数を見てみると、全 57 点中 24 点で頭部から脚部まで遺存しており、出土総数の 4 割以上で全体像を把握できる形状を保っていることが分かる。また、頭部だけ破損しているものが 13 点、一方で脚部だけ破損しているものは 9 点を数える。このヒト形小像を横から見ると、身体部は扁平であり後頭部が張り出した形状となっている。そのため、ヒト形小像を平坦な場所に寝かせ、上方より力を加えたならば、その荷重は首にもっともかかるであろう。なお、身体部のいずれかの部位を欠損している 33 点に関して、部位間それぞれの破損数は頭部／胸部が 20 点、胸部／胴部が 4 点、胴部／脚部が 10 点となっており⁸⁾、やはり構造的に壊れやすいとされる頭部と胸部の境（頸部の付け根）で破損することが多い傾向が窺える。しかし、それ以上の 24 点で大きな破損もなく頭部から脚部までの全体が遺存しており、また、頭部・胸部が繋がった状態の製品は全 57 点中 36 点を占めるため、ヒト形小像に関しては頭部と胸部の境で壊れやすいとは言い難い。

改めて問題となるのは、頭部の巻き付けた粘土の破損状態である。頭部の粘土が残る 30 点のすべてにおいて、その半ばほどから破損している。前頭部から頭頂部にかけて大きく剥がれ落ち、後頭部の粘土は比較的遺存していることが多い。頭部を球体と見たならば、その 4 分の 1 を割りにとって内部を曝したような状態にある。壊れやすいとされる突出部や接合部ではない、頭部の粘土の真ん中から破損していることを「自然な破損」の結果とみなし、そのような製品が多いことを自明と考えることは受け入れがたい。クレッターが述べているような、打ち欠くための打点ポイントなどを見出すことはできないが、意図的な破壊行為が行なわれたのではな



第 8 図
「分割塊製作法」

いだろうか。力の加減によっては頭部に巻き付けた粘土がすべて外れることもあるだろうし、頭部が折れてしまうこともあるだろう。出土したヒト形小像のような壊れ方は、前頭部の中央付近、つまり顔にあたる部分を、粘土の一部を割り取るように叩くまたは押し込むように力を加えた結果ではないだろうか。

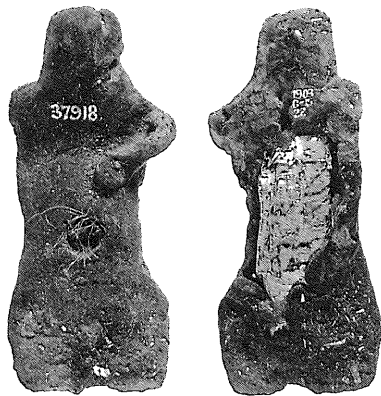
Ⅲ．土製ヒト形小像の機能と民間信仰

1. 破壊の呪術行為

アクリス遺跡出土の土製ヒト形小像の頭部が意図的に破壊されたならば、何を目的とした行為だったのであろうか。何らかの目的や願いを持ってモノを壊す行為は「呪術 (Magic)」の範疇で語られることだが、現代社会においては不可解で非科学的な行為であったり、人間に害を与えるような行為としてマイナスのイメージを持たれることが多い。しかし、必ずしも害を与え、マイナスの結果を引き起こすばかりのものではなく、フレイザー (J. Frazer) が『金枝篇』で紹介しているように世界中で様々な種類の呪術が存在しており、プラスの結果を導くために行う呪術行為も存在している (フレイザー 2004)。

科学の領域が広まった我々の身の回りにおいても、「占い」「おまじない」「験担ぎ」「ジンクス」といった単語を日常会話の中で頻繁に用いており、また、寺社で絵馬を奉納し御守を購入するなど、超自然的なものを受け入れる思考や行為に溢れている。このような傾向は古代社会においてはより顕著であったと思われ、古代エジプトにおいては宗教と呪術の境界は不明瞭であり、儀礼・儀式や医術との線引きも難しいものであるとされている⁹⁾ (Ritner 1997, Shaw 2008 など)。

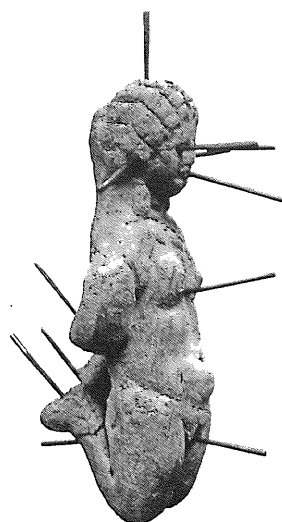
古代エジプトにおいて、効果を期待して意図的にモノを破壊する行為として知られているものの1つに「呪詛文書 (Execration texts)」がある。これは古王国時代から見られるもので、捕虜の姿をした小像や土器に国家の敵となる地域や人びと (民族) の名前を記し、打ち壊して埋めることで、そこに記された地域や人びとに勝利することができると考えられていた。また、同様の呪術行為として「赤色土器の破壊 (Breaking the red vases)」というものがあり、敵性を示す赤色の土器を壊すことで悪や災いを避けていたという (Ritner 1997)。古代エジプトの歴史の早い段階から、墓の副葬品を壊すことは、そのモノと同化している死者を「殺す」ことにつながると考えられていた。こうした考え方はトトメス3世のハトシェプスト女王に対する、または、アクエンアテン王のアモン神に対する、彼らの図像や名前を消すことによっても窺い知ることができよう。



第9図 呪術用の蠟製小像

上記のような、作用を及ぼす対象者と類似したモノなどに働きかける呪術行為をフレイザーは「類感呪術 (Homoeopathic Magic)」と呼んでおり、「感染呪術 (Contagious Magic)」とともに「共感呪術 (Sympathetic

Magic)」の原理の1つとしている。『金枝篇』ではもちろん古代エジプトにおける類感呪術の例を取り上げており、それによれば、人の血や髪の毛、爪、衣服の切れ端などを蠟に混ぜ込み、対象者に似せた人形を作り上げると、呪術師の思うままになったと紹介している。こうした道具は使い方によっては危険が生じるため、宗教的な用途に限定されるようになり、太陽神ラーの敵の姿を蠟で作って名前を書き、それをナイフで切り刻み、踏みつけるなどして、最後に燃やしたという。そうすることで敵を打ち負かし、恵みをもたらす太陽神を助けるという儀式が行われていたという（フレイザー 2004）。こうした呪術行為の存在を証明するかのようなローマ期のヒト形小像が知られている。蠟で作られた小像のヘソには毛髪が押し込められ、背面からは胎内に詰められたパピルス片が顔を覗かせている（第9図）。パピルス片の内容が分からないため、この小像の実際の使用目的は不明であるが、類感呪術に用いられた小像だったのであろう（Pinch 2006a）。



第10図
呪術用の土製女性小像

また、プラスの効果을期待して作られた小像がルーブル美術館に所蔵されている（Louvre inv. E27145）。それはアンティノオポリス（Antinoopolis）近郊で出土したローマ期の女性像であり、後ろ手に縛られた膝立ちの姿をしており、頭頂・眼・耳・口・胸の中心・掌・足裏・性器に合計13本もの青銅製の針が突き立てられた異様な姿をしている（第10図）。一見、その姿は対象者に肉体的な痛みを与えたり、災いをもたらすための類感呪術の行為が行われたことを想像してしまいが、実際は対象者への強い愛情から行われたことのようなのである。女性像とともに出土したパピルス文書には呪術行為の内容が記されており、それによれば「彼女の〇〇に針を突き刺すことによって、彼女は自分だけを想ってくれるでしょう」と呪文を唱えながら針を突き刺したのだという（Pinch 2006a）。したがって、やや倒錯しているかもしれないが愛情を得るための呪術であり、対象者に危害を加える目的でないことは明らかである。

2. 土製ヒト形小像が象るものとその機能

古代エジプトで行われた破壊を伴う呪術行為の例をみてきたが、アコリス遺跡で出土した土製ヒト形小像は何を象り、どのような願いを込めて作られた製品だったのだろうか。

メソポタミアや東地中海地域で出土するヒト形小像の中では、新石器時代の遺跡から乳房や臀部などの身体的特徴を強調した女性小像の研究が数多く行われている。これらの女性小像は地母神信仰と結びつき、宗教的な機能を持つ女神像として解釈されることが多い。しかし、一概に女神像とみなすことに対しては反論もあり、女性小像の機能についてはフォイクト（M. Voigt）の研究が引用されたり、参考にされたりすることが多い。アッコー（P. J. Ucko）の民族学的事例を加味した解釈に影響を受けたフォイクトは、北西イランでの発掘調査で出

土したヒト形製品について5つの機能を挙げている。それは、(1) 宗教祭儀用の小像 (Cult figurines), (2) 呪術の媒体 (Vehicles of magic), (3) 教育・教示用の道具 (Didactic or teaching figures), (4) 玩具 (Toys), (5) 死者の姿 (Representations of deceased person) である¹⁰⁾。フォイクトは、ヒト形小像は「宗教祭儀用の小像」としての機能が良く知られており、「教育・教示用」や「玩具」として明確に使用・製作された古代の製品はないとしているが、その機能を1つに限定することはできないとしている (Voigt 1983)。

エジプトで出土するヒト形小像のうち、神像・王像・シャブティ¹¹⁾、もしくは名前が特定できる私人像などを除くと、機能などが不明瞭な小像はやはり女性の姿をした製品が多いように思われる¹²⁾。アッコーが行った先王朝時代のヒト形小像の研究では、分析対象とした95点のヒト形小像のうち、男性小像が15点 (15.8%)、女性小像が51点 (53.7%)、不明が29点 (30.5%) となっている。これらのヒト形小像の機能については、シャブティ (Shabti), 子供の玩具 (Toys), 儀礼における教示用 (Instruction for initiation rites), 共感呪術の媒介物 (Vehicles for sympathetic magic), 愛人小像 (Concubines), 哀悼者の小像 (Mourning figurines) などを挙げている (Ucko 1962, 1968)。

また、中王国時代や新王国時代のヒト形小像に関してはピンチ (G. Pinch) による研究が大きな成果をあげている。「妻 (Wife)」「愛人 (Concubine)」や「同衾者 (Beischläferin)」と呼ばれていた女性小像を一括し、「豊饒小像 (Fertility figurine)」¹³⁾ と呼称することをピンチが提唱し、現在ではその呼称が定着しつつある。これらの女性小像の機能は豊饒を願ったものとされるが、「豊饒」の持つ意味や範囲に関しては様々な解釈が見受けられる。ピンチ自身は主に妊娠・出産、子供の養育に関わる「豊饒」をイメージしており、穀物の豊穰や家畜の多産に関してはあまり触れていない。一方、ヘルブル (G. Hölbl) の解釈では「豊饒」は妊娠・出産に限らず、大地や穀物の豊穰も含んだものとしており (Hölbl 1986)、また、スティーブンス (A. Stevens) は「豊饒」に含まれるものとして、妊娠・出産、子供の養育、性的な交わり、さらには死後の復活再生などが含まれるとし、墓や神殿や家庭内の祠堂など出土コンテクストに左右されない、幅の広い解釈を与えている (Stevens 2006) (第11図)。

エジプトにおいても、メソポタミア・東地中海域においても、ヒト形小像は乳房や陰部などが強調され、はっきりと性差の身体的特徴が表されているものが多い。しかし、アコリス遺跡で出土した土製ヒト形小像は、乳房や陰部、顔や髪の毛の表現が全くないため性別を判断することができず、大人と子供のどちらを象っているかについても不明である。

また、出土した57点中47点で見られる貼り付けられた突起物は何を表しているのだろうか。47点中40点に1個の突起物付き、いずれも身体部の中心線付近に位置している。残り7点は複数の突起物を持っているが、仮に複数個の突起物を持った製品を考慮しないならば、突起物が「ヘソ」を表していると考えられるのではないだろうか¹⁴⁾。

エジプトの先王朝時代のヒト形小像をまとめたアッコーによれば、小像の性別を判断する基準として、男性像は陰茎、女性像は乳房の表現があることを挙げており、ヘソは象牙製の製品

に見られるだけで、土製のヒト形小像にはないという (Ucko 1968)。中王国時代や新王国時代の女性像にはヘソがあるが、これらは刺突点によって表現されており、メソポタミア・東地中海地域で出土する女性像のヘソも同じような形状となっている。日本の縄文土偶も刺突点でヘソが表現されることが多く、乳房よりも性差を強調する身体的特徴とさえ言われている (水野 1997)。これまでエジプトで出土しているヒト形小像においてヘソが強調されたことはなく、さらに刺突点による表現ではなく、ボタン状の塊を貼り付けた「デベン」状のものは非常に珍しい。上述したローマ期の蠅製のヒト形小像を除いては、壁画やレリーフなどの図像資料においてもヘソが強調されていたり、「デベン」の人間が描かれたりする例を知らない。

乳房や陰部などの身体的特徴による性差表現がみられず、「デベン」が強調されていることを鑑みると、アコリス遺跡出土のヒト形小像は乳幼児期の子供を象っていると考えられないだろうか。幼い頃は性差による身体的特徴があまりなく、図像資料に描かれる子供の性別も判断できないものが多い。また、腹筋の発達していない乳児期は、力むと腸が飛び出した状態となって「デベン」(膈ヘルニア) になるとのことで、生後数ヶ月までは良く見られるという¹⁵⁾。

子供の像が単独で造られることはほとんどなく、通常は親の横に立つ姿や、母親の膝に座る姿で表現されている。そのいずれも子供に焦点を当てたものではなく、家族の集合像であったり、母性を強調するために付された像となっている。彫像や壁画において子供を示す図像表現は定型化しており、頭髪の大部分を剃りあげ、髪の一部を辮髪のように横に垂らした「若年の鬚房 (Sidelock of youth)」の姿がそれに当たる。また、人差し指を咥えた姿も子供を表す仕草となっており、ヒエログリフサインにも用いられている。また、子供のホルス神 (ハルポクラテス) を表した像が末期王朝時代以降に数多く作られており、イシス女神の膝の上に座った姿や装飾板 (キップス) に立ち姿が描かれている。装飾板に描かれた子供のホルス神は髪束を横に垂らし、裸体で表現され、手には蛇やサソリ、ライオンなどを握り、ワニを足元に踏みつけている。これは有害な生き物から身を守り、もし噛まれたりした場合には治癒の効力を期待したものとされている

(第 12 図)。アコリス遺跡出土のヒト形小像は「若年の鬚房」は確認できず、また指を咥えた姿ではないが、しかし、乳房や陰部などの表現がない、中性的な身体表現の像はしばしば「子供」とされることがある。



第 11 図 王朝時代ヒト形小像例
(左; 木製「パドル形」人形, 中; 土製女性像, 右; 「ベッド模型」女性像)



第12図
ハルポクラテスの装飾板

古代社会においては現代よりも乳幼児の死亡率が高く、子供の無事な成育を願う気持ちは非常に強かったに違いない。子供を象ったヒト形小像を作り、その頭部を破壊して「死」を与えることで、実際の子供たちの無事を願ったのではないか。言うなれば、日本の「形代（カタシロ）」や「人形（ヒトガタ）」にあたるもので、ヒト形小像を子供本人の身代わりとしたのだろう。広義の解釈を与えるならば、出産時の危険は母体にも及んだであろうし、母親と子供双方の無事を願うものであったかもしれない。さらに、新しい家族が増えることは食糧を十分に手にする必要がある、穀物や家畜の豊穡多産を願いもしただろう。乳幼児の死を忌む「形代」としての役割だけではなく、妊娠や安産祈願、食物の豊穡や家畜の多産などを願った「豊饒小像」の一種であった可能性もあるだろう。

3. アコリス遺跡の「民間信仰」

古代エジプトの伝統的な神々の神殿などで執り行われていた公的な宗教祭儀に較べると、地方都市や農村で暮らす一般民衆が抱いていた信仰や行っていた儀礼などはほとんど知られておらず、そこで行われた儀礼や呪術行為はさらに記録として残りにくいものである（Kemp 1995）。英語で Private Religion や Personal Religion などと称される言葉は「民間信仰」と訳すこともできるが、本稿では「私的信仰」と呼び、区別することとする。

「私的信仰」は国家規模の公的な祭祀に対する、家庭内や個人の信仰を表している¹⁶⁾。つまり、私的信仰は古代エジプトの伝統的な神々に対する信仰であり、至聖所まで入ることのできない民衆は神殿の中庭やその周辺などを私的信仰の場とし、各家庭内においても儀礼が行われていたと思われる。こうした私的信仰はアクエンアテン王がアテン神を唯一神と定めた「アマルナ時代」においても続けられており、アマルナ遺跡からはアテン神だけでなく、ベス神、タウェレット女神、ハトホル女神、ミン神など伝統的な神々の護符や小像などが数多く出土している。同じく新王国時代のデイル・エル・メディーナ遺跡（Deir el Medina）でもさまざまな神々の祠堂が建てられており、神々が願いをしっかりと聞き届けてくれるように耳を描いた奉納ステラも多数出土している（Bomann 1991, Stevens 2006 など）。また、アコリス遺跡を事例として古代エジプトの伝統的な神々のヘレニズム化について論じた山花京子は、アコリス遺跡の岩山全体を聖域とみなしたならば、岩窟神殿や祠堂が数多く造られた岩山北側が公的な信仰の場であり、南地区のある岩山南側は一般大衆の私的信仰の場であった可能性も否定できないとしている¹⁷⁾（山花 2003）。

一方、「民間信仰」は信仰を個人の関心においている私的信仰とは異なり、狭い地域社会や共同体が支えているものである（桜井 1971 ほか）。神々と結びついた神殿や祠堂や礼拝施設な

どが建立されず、地域社会の人びとの間でのみ流布したもので、現世利益を強く求めたものと思われる¹⁸⁾。アコリス遺跡の岩山北裾には岩窟神殿や祠堂などが点在し、時代を通じて様々な献納品が見つかっているが、こうした、いわば公的な信仰の場からは1点の土製ヒト形小像も出土していない点にも注目すべきであろう。地方の小さな集落に住む一般民衆にとっては、神々の名前や性格が大切なのではなく、いまの自分たちの毎日の生活の安寧が最も重要だったのではないだろうか。国家を支える王や神官、高官たちも国家の豊饒を祈ったであろうし、その豊饒が死後の世界まで続くように願って墓を壁画で飾り、たくさんの副葬品を所有した。来世での豊饒を願った点で民衆のそれとは大きく異なっている。一般民衆にとっては死後の世界で復活再生し、不自由なく生活できるように手厚く葬ることよりも、現世を生き抜くことができるようにヒト形小像を作り、さらには豊饒を願う、そのような現世利益を求める「民間信仰」が広く行われていたとしても不思議ではないのではないだろうか。

4. 今後の課題

アコリス遺跡出土の土製ヒト形小像は死亡率の高い乳幼児期の子供の健康な成育を願って作られたもので、小像の頭部を破壊して「死」を与える呪術的行為が行われたと推論し、子供本人に代わって小像を身代わりの形代（カタシロ）とする「民間信仰」が存在していたのではないかと結論づけた。さらに、子供の成育だけではなく、母親の安産、穀物の豊穡、家畜の多産など、広く豊饒を願う機能を持った「豊饒小像」であった可能性を指摘した。

子供の成育を願うにしろ、広義の豊饒を願うにしろ、住居址や穀物倉庫址からの出土が明確に確認されているわけではなく、出土コンテクストがまだ不明の点は今後の発掘調査が期待される。南地区の斜面上方からの出土が多い点に注目したならば、斜面上方や岩場に何らかの聖域や祭祀を行った施設があった可能性があるだろう。岩山の岩壁面、南斜面を見下ろす位置には、ヘレニズム期の女神と双子のディオスクーロイ神が刻まれた磨崖レリーフが存在しており、時代を遡った第3中間期にも岩場に祭祀を行う場が作られていたとしても不思議ではない。

また、死を遠ざけるための形代と考えたとき、南地区に埋葬された遺体との関連性はあるのだろうか。南地区に埋葬された遺体は女性と子供の比率が高く、子供の成育や母親の安産を願うヒト形小像との繋がりが指摘できよう。しかし、その埋葬場所や時期には不明な点が残っている。それは建造物が廃棄された直後に埋葬されている例が多く、周辺では人間の活動が続いていたと思われる点である。同時期の墓域を西地区に持っており、何故わざわざ南地区に埋葬したのかという疑問を持たざるを得ない。つまり、死を遠ざける面を重視したならば、居住域や工房域である南地区ではなく、墓域である西地区から大量に出土しても良いのであるが、実際には南地区から46点、西地区から11点を数える。概して、アコリス遺跡の南地区は居住域、生産域であり、西地区は墓域と言えるのであるが、ヒト形小像を通して見た信仰や祭儀の場として考えた際には、それらを単純に区分することはできないだろう。

アコリス遺跡出土の土製ヒト形小像は他の遺跡からの類例が見られない製品であるため、そ

の用途や機能については今後の発掘調査の成果に左右されることもあるだろう。現段階では、通常は公的な宗教祭儀と私的信仰の2つに分けて考える古代エジプトの信仰形態に民間信仰の概念を加えて考察することが必要となるだろう。また、このような文字資料や図像資料には現れにくい信仰があることを念頭におきながら考古学資料を扱い、地方社会に暮らす民衆の生活を復元することが課題となる。

本稿を草するにあたり、アコリス遺跡調査隊（隊長：筑波大学川西宏幸教授）のメンバーを始め、筑波大学先史学・考古学コースの教員の方々に御指導、御助言を賜りました。末尾ながら御礼申し上げます。

註

- 1) アコリス遺跡の調査は20世紀初頭にフランス隊によって岩山北裾の神殿域（西方神殿）を中心に行われている。1981年より（財）古代学協会が、1997年以降は筑波大学を中心とした調査団（発掘隊長：川西宏幸筑波大学教授）によって発掘調査が行われている。1981年以降の発掘調査の詳細は、The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee, *AKORIS-Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. (1995) を参照。1997年以降の調査概要に関しては毎年概報が刊行されている。Kawanishi, H. et al. (eds.) *Preliminary Report AKORIS 1997-2007*. (1998-2008) .
- 2) Akoris 1995 は、The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee 1995 *AKORIS: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo. の略号。
- 3) PR Akoris は Kawanishi, H. et al. (eds.) *Preliminary Report AKORIS*. Ibaraki, University of Tsukuba の略号。数字は調査の年度を表している。
- 4) 遺跡内で行われている現代の民間信仰については、辻村純代 1990 「穴潜りの話－エジプト農村の土俗信仰」『古代文化』42巻7号 47-52頁、岩崎真紀『現代エジプト社会における宗教的マイノリティーの信仰世界：コプト・キリスト教を中心として』（筑波大学博士（文学）学位論文、2008年）などに詳細が記されている。
- 5) Judaean Pillar Figurines の和訳「ユダ式柱状土偶」については、杉本智俊（2001）の用語に倣った。
- 6) 研究対象とした300点以上の製品の中で、完形品の占める割合は5%程度である。完形品のほとんどが墓からの出土である（Kletter 2001）。
- 7) 40体の小像レプリカを作成して実験している。レプリカはエルサレム北部の terra rossa の粘土を使用し、手捏ねで成形し、600-700度で焼成。高さ1.5-2mの位置から様々な向きで地表に落とし、その破損箇所を調べている（Kletter 2001 : p. 191）。
- 8) 対象とした全57点のうち24点は頭部から脚部までの全身が遺存しており、残り33点が対象となっている。しかし、胸部のみ遺存している1点については、頭部／胸部と胸部／脚部の双方にカウントしたため、小計が34点となっている。
- 9) 宗教的場面で用いられる小像と、共感呪術の媒介として使用される小像ははっきりと異なるものとして、アッコーは宗教と呪術を暗に区別している。
- 10) (1) 宗教祭儀用の像 Cult figurine は崇拜のシンボルや対象として用いられる超自然的な存在を表す。(2) 呪術の媒体 Vehicles of magic は特別な状況を提供する・避ける・転換するための儀式において鍵となる要素として扱われる。(3) 教育・教示用の道具 Didactic or teaching figures はイニシエーション儀式などにおいて性的なことを教えるときなどに用いられる。(4) 玩具 Toys は娯楽のために用いられる。(5) 死者の姿 Representations of deceased persons は、葬送品として用いられ、死者と近い関係の人々や動物なども含まれる。

- 11) シャブティ (Shabti) は副葬品として墓に納められ、主人である死者の代わりに労働を担うとされる像。通常、ミイラの姿で表される (イアン・ショー 1995 : 225-226 頁)。
- 12) Fertility figurine の和訳に関しては、「大英博物館古代エジプト百科事典」(イアン・ショー他, 内田杉彦訳 1997) の中では「多産小像」の語が用いられているが、本稿では人間の出産だけでなく、穀物や家畜にも完形した広義の意味を含ませるために「豊饒小像」としている。なお、穀物に限定する場合には「豊穰」を用いて区別している。
- 13) 機能が不明瞭な小像は、フォイクトの分類における「宗教祭儀用の小像」「呪術の媒体」と解釈されることが多いが、それらの解釈に懐疑的な考え方をする場合、「玩具」と看做される傾向がある。鈴木八司氏所蔵の古代エジプトの遺物の中にヤシの葉で中軸を作り、布を巻き、粘土を被せた製品がある。時代は新王国からコプト時代となっており、おそらく出土地も不明のものであるが、「幼児用の人形玩具らしい」との解説がついている (古代オリエント博物館 1995: 図 74, 75)。
- 14) 辻村純代は「円形貼付け文は妊娠状態を示すのか、あるいは臍を表現した可能性がある。もし後者ならば、全体の特徴も合わせ乳幼児の体を表現しているのではあるまいか」としている (辻村 2005: 58 頁)。
- 15) 日本小児外科学会 HP を参照した。http://www.jsps.gr.jp/05_disease/ms/navel_h.html (2005 年更新? 2009 年 3 月 31 日最終確認)。また、フレイザーの『金枝篇』には世界各地の臍の緒に関する感染呪術の例が紹介されており、オセアニア、アジアなどを中心に南北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパと世界各地で、臍の緒は子供と強く結びついたものと考えられている (フレイザー 2004 : 136-146 頁)。
- 16) 本稿で「私的信仰」とした用語は、Personal Religion, Private Religion, Domestic Religion, Popular Religion などの英単語に対応するものであり、いずれも「民間信仰」とも訳すことができるものである。英語文献においても、その用語の使い分けに明確な定義はなく曖昧である。本稿では、王や神官が執り行う国家行事ともいえる公的な宗教祭儀に対して、神殿の周辺や家庭内で行う「伝統的な神々に対する信仰」を私的信仰と称している。一方で「民間信仰」は、伝統的な神々の存在が希薄、または介在せず、特定の地域社会でのみ流布した信仰を指している。なお、呪術的な要素が強くなると、Cultic-magical, Magico-religious, Magical practice, Cultic Activity などの英単語が用いられている。
- 17) 山花の論考中では「民間信仰」の語が用いられているが、註 15 で示したように本稿では「民間信仰」と「私的信仰」を使い分けている。公的な祭祀が行われていたと思われる国家神・都市神を祀っている神殿に対して、その他の神々を祀った小さな祠堂を民間信仰の場と山花は位置づけており、本稿での使用法に照らし合わせて「私的信仰」と読み替えている。
- 18) 出産や家庭の守り神として信仰を集めたベス神やタウエト女神であるが、実際には彼らのために建立された大規模な礼拝場所や神殿は持っていなかったとされる。鈴木八司は民衆の信仰について「アメンやレー等の主な国家神に関して深く高邁な神論ももたなかった」としている (古代オリエント博物館 1995 : 43-44 頁)。

出典一覧

図 1-7 筆者作成または撮影 (アコリス遺跡調査隊提供・協力を含む)

図 8 小野正文 1984 27 頁 図 1

図 9 Pinch, G. 2006 a p. 91 Figs. 46, 47

図 10 Ritner, R. K. 1997 p. 112 Fig.2 (Louvre inv. E27145)

図 11 左 ; 東京新聞編 1996 156 頁 図 237 (Inv. L.VII.12), 中 ; 古代オリエント博物館 1994 12 頁, 右 ; Hayes, W. C. 1990 p. 219 Fig.135

参考文献

Andreu, G. et al. (eds.) 1997 *Ancient Egypt at the Louvre*. Paris, Hachette.

Badre, L. 1980 *Les Figurines Anthropomorphes en Terre Cuite A L'Age du Bronze en Syrie*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

- Baines, J. 1987 Practical religion and piety. *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 73, pp. 79-98.
- Baines, J. 2001 [1985] *Fecundity Figures: Egyptian Personification and the Iconology of a Genre*. Oxford, Griffith Institute.
- Bell, H. 1948 Popular religion in Graeco-Roman Egypt: I. The Pagan period. *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 34, pp. 82-97.
- Bergamini, G. 1988 Religious and funerary practices in Egypt prior to the pharaohs. In Roveri, A. M. D. (ed.) *Egyptian Civilization: Religious Beliefs*. Turin, Istituto Bancario SanPaolo, pp. 20-37.
- Bierbrier, M. 1982 *The Tomb-Builders of the Pharaohs*. London, British Museum Press.
- Boghouts, J. F. 1994 Magical practices among the villagers. In Lesko, L. H. (ed.) *Pharaoh's Workers: The Villagers of Deir el-Medina*. Ithaca and London, Cornell University Press, pp. 119-130.
- Bomann, A. H. 1991 *The Private Chapel in Ancient Egypt: A Study of the Chapels in the Workman's Village at El Amarna with Special Reference to Deir el Medina and other sites*. London, Kegan Paul International.
- Bonanno, A. (ed.) 1986 *Archaeology and Fertility Cult in the Ancient Mediterranean*. Malta, The University of Malta Press.
- Capel, A. K. and G. E. Markoe (eds.) 1996 *Mistress of the House, Mistress of the Heaven: Woman in Ancient Egypt*. Cincinnati, Cincinnati Art Museum.
- Casson, L. 2001 [1975] *Everyday Life in Ancient Egypt*. Baltimore, The John Hopkins University Press.
- Cauvin, J. 2000 *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Frankfort, H. 1958 The archetype in analytical psychology and the history of religion. *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 21, pp. 166-178.
- Friedman, F. D. 1994 Aspects of domestic life and religion. In Lesko, L. H. (ed.) *Pharaoh's Workers: The Villagers of Deir el-Medina*. Ithaca and London, Cornell University Press, pp. 95-117.
- Giddy, L. 1999 *Kom Rabi 'a: the New Kingdom and Post-New Kingdom Objects*. London, The Egyptian Exploration Society.
- Gunn, B. 1916 The religion of the poor in ancient Egypt. *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 3, pp. 81-94.
- Hölbl, G. 1986 Egyptian fertility magic within Phoenician and Punic culture. In Bonanno, A. (ed.) *Archaeology and Fertility Cult in the Ancient Mediterranean*. Malta, The University of Malta Press, pp. 197-205.
- Institut Français D'Archéologie Orientale du Caire 1988 *Inscriptions Grecques et Latines D'Akôris*. Cairo, IFAO.
- Ishida, T. (ed.) 1982 *Studies in the Period of David and Solomon and Other Essays*. Tokyo, Yamakawa.
- Kawanishi, H. et al. (eds.) 2003- *Preliminary Report Akoris 2002-*. [ab. PR] Ibaraki, University of Tsukuba.
- Kemp, B. J. 1995 How religious were the ancient Egyptians?. *Cambridge Archaeological Journal*, vol. 5-1, pp. 25-54.
- Kletter, R. 2001 Between archaeology and theology: the pillar figurines from Judah and the Asherah. In Mazar, A. (ed.) *Studies in the Archaeology of the Iron Age in Israel and Jordan*. Sheffield, Sheffield Academic Press, pp. 179-216.
- Liebowitz, H. 1988 *Terra-cotta Figurines and Model Vehicles*. Malibu, Undena Publications.
- Mazar, A. 2001 *Studies in the Archaeology of the Iron Age in Israel and Jordan*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- McDowell, A. G. 2001 [1999] *Village Life in Ancient Egypt: Laundry Lists and Love Songs*. Oxford, Oxford University Press.
- Meskel, L. 1999 *Archaeology of Social Life*. Oxford, Blackwell Publisher.
- Meskel, L. 2005 [2002] *Private Life in New Kingdom Egypt*. New Jersey, Princeton University Press.
- Montserrat, D. 1996 *Sex and Society in Graeco-Roman Egypt*. London, Kegan Paul International.
- Moorey, P. R. S. 2001 *Idols of the People: Miniature Images of Clay in the Ancient Near East*. Oxford, Oxford University Press.
- Peet, T. E. & C. L. Woolley (eds.) 1923 *The City of Akhenaten, Part I: Excavations of 1921 and 1922 at El-'Amarneh*. London, Egypt Exploration Society.

- Pinch, G. 1983 Childbirth and female figurines at Deir el-Medina and el-‘Amarna. *Orientalia*, vol. 52(3), pp. 405-414.
- Pinch, G. 1993 *Votive Offerings to Hathor*. Oxford, Griffith Institute.
- Pinch, G. 2006 a [1994] *Magic in Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Pinch, G. 2006 b [1995] Private life in ancient Egypt. In Sasson, J. M. (ed.) *Civilizations of the Ancient Near East*. Massachusetts, Hendrickson Publishers, pp. 363-381.
- Pischikova, E. V. 1994 Representations of ritual and symbolic objects in Late XXVth Dynasty and Saite private tombs. *Journal of American Research Center in Egypt*, vol. 31, pp. 63-78.
- Quike, S. 1992 *Ancient Egyptian Religion*. London, British Museum Press.
- Ritner, R. K. 1997 [1993] *The Mechanics of Ancient Egyptian Magical Practice*. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago (SAOC No.54) .
- Rosalind, M. and J. J. Janssen, 2007 *Growing Up and Getting Old in Ancient Egypt*. London, Golden House Publications.
- Roveri, A. M. D. (ed.) 1988 *Egyptian Civilization: Religious Beliefs*. Turin, Istituto Bancario SanPaolo.
- Sadek, A. I. 1987 *Popular Religion in Egypt during the New Kingdom*. Hildesheim, Gerstenberg Verlag.
- Shafer, B. E. (ed.) 1991 *Religion in Ancient Egypt: Gods, Myths, and Personal Practice*. Ithaca and London, Cornell University Press.
- Shaw, I. and P. T. Nicholson, 2008 [1995] *British Museum Dictionary of Ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- Spalinger, A. 1998 The limitations of ancient Egyptian religion. *Journal of Near Eastern Studies*, vol. 57(4), pp. 241-260.
- Stevens, A. 2003 The material evidence for domestic religion at Amarna and preliminary remarks of its interpretation. *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 89, pp. 143-168.
- Stevens, A. 2006 *Private Religion at Amarna-The Material Evidence-*. Oxford, BAR International Series 1587.
- Strouhal, E. 1997 [1992] *Life of the Ancient Egyptians*. Liverpool, Liverpool University Press.
- Szpakowska, K. 2008 *Daily Life in Ancient Egypt: Recreating Lahun*. Oxford, Blackwell Publisher.
- Tadmor, M. 1982 Female cult figurines in Late Canaan and Early Israel: archaeological evidence. In Ishida, T. (ed.) *Studies in the Period of David and Solomon and Other Essays*. Tokyo, Yamakawa, pp. 139-174.
- Taylor, J. H. 2001 *Death and the After Life in Ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- The Organization of Egyptian Antiquities, 1987 *Official Catalogue the Egyptian Museum Cairo*. Mainz, VPZ.
- The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee 1995 *AKORIS: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. [ab. Akoris] Kyoto, Koyo Shobo.
- Tooley, A. M. J. 1991 Child's toy or ritual objects?. *Göttinger Miszellen*, vol. 123, pp. 101-111.
- Ucko, P. J. 1962 The interpretation of prehistoric anthropomorphic figurines. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 92-1 and 2, pp. 38-54.
- Ucko, P. J. 1968 *Anthropomorphic Figurines of Predynastic Egypt and Neolithic Crete with Comparative Material from the Prehistoric Near East and Mainland Greece*. London, Andrew Szmidla.
- van Straaten, Z. 1986 Philosophical paradigms of fertility cult interpretations: philosophical perspectives on seasonal goddesses. In Bonanno, A. (ed.) *Archaeology and Fertility Cult in the Ancient Mediterranean*. Malta, The University of Malta Press, pp. 31-42.
- Voigt, M. M. 1983 *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement*. University Museum Monograph 50. Philadelphia, The University Museum.
- Waraksa, E. A. 2008 Female figurines (Pharaonic period) . In Wendrich, W. et al. (eds.) *UCLA Encyclopedia of Egyptology*.
- Wilkinson, R. H. 2003 *The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt*. Cairo, The American University in Cairo Press.

- 有村誠 1996「西アジア新石器時代の土偶について」『筑波大学先史学・考古学研究』7号 35-58頁．
- A. E. イェンゼン著, 大林太良, 他訳 1977『殺された女神』(人類学ゼミナール2) 弘文堂．《Jensen, A. E. 1966 *Die getötete Gottheit: Weltbild einer frühen Kultur.*》
- 江坂輝彌 1990『日本の土偶』六興出版．
- M. エリアーデ著, 堀一郎訳 1968『大地・農耕・女性 - 比較宗教類型論 -』未来社．《Eliade, M. 1958 *Traité d'histoire des religions: Patterns in comparative religion.*》
- 大城道則 2008「原始絵画から読み解く古代エジプト文化 - 女性・船・来世観 -」『駒沢史学』69号 77-101頁．
- 小野正文 1984「土偶の分割塊製作法資料研究(1)(東京都神谷原遺跡の土偶)」『丘陵』11号 26-34頁．
- 古代オリエント博物館 1994『いにしへのヴィーナスたち - 古代オリエントの豊穡の女神 -』
- 古代オリエント博物館 1995『遙かなるエジプト - 古代人の生活を探る -』
- 小林達雄 1997「縄文土偶の観念技術」「土偶とその情報」研究会編 1997『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』1 勉誠社．
- 桜井徳太郎 1971『民間信仰と現代社会 - 人間と呪術 -』評論社．
- イアン・ショー&ポール・ニコルソン著, 内田杉彦訳 1997『大英博物館 古代エジプト百科事典』原書房．《Shaw, I. and P. T. Nicholson, 1995 *British Museum Dictionary of Ancient Egypt*. London, British Museum Press.》
- 杉本智俊 2001「円盤を持った女性土偶 - その性格と機能 -」『史学』70巻3・4号 135-170頁．
- 丹司正子 1983「チャタルフックの偶像 - その意味についての一考察 -」『地中海学研究』IV 3-32頁．
- 辻村純代 2005「古代エジプトの騎馬土偶」『ラーフィダーン』XXVI 53-67頁．
- 東京新聞編 1996『オランダ国立ライデン古代博物館所蔵古代エジプト展』
- 「土偶とその情報」研究会編 1997『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』1-4 勉誠社．
- 花坂哲 2004「古代エジプトの皮革技術 - アコリス遺跡検出の「皮革工房址」をめぐる -」『筑波大学先史学・考古学研究』第15号 53-77頁．
- 花坂哲 2005「皮革製サンダル考 - エジプト・アコリス遺跡を例に -」『西アジア考古学』第6号 87-101頁．
- 花坂哲 2006「アコリス遺跡出土の土製鋳型とガラス製ビーズに関して」『GLASS』第49号 33-40頁．
- 馬場恵二 2006『癒しの民間信仰 - ギリシアの古代と現代 -』東洋書林．
- 春成秀爾 2007『儀礼と習俗の考古学』塙書房．
- 藤尾慎一郎 2002『縄文論争』講談社．
- 藤沼邦彦 1997『歴史発掘3 縄文の土偶』講談社．
- J. G. フレイザー著, 神成利男訳 2004『金枝篇 - 呪術と宗教の研究1 呪術と王の起源(上)』国書刊行会．《Frazer, J. G. *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion I: The Magic Art and The Evolution of Kings.*》
- フェルナン・ブローデル著, 尾河直哉訳 2008『地中海の記憶 - 先史時代と古代 -』藤原書店．《Braudel, F. 1998 *Les Mémoires de la Méditerranée-Préhistoire et Antiquité-*.》
- リーケ・マニケ著, 酒井傳六訳 1990『古代エジプトの性』法政大学出版局．《Manniche, L. 1987 *Sexual Life in Ancient Egypt.*》
- 水野正好 1997「土偶研究の新しい視点」「土偶とその情報」研究会編 1997『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』4 勉誠社．
- 山花京子 2003「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について - 中部エジプトのアコリス遺跡を例に -」『文明』3号 67-76頁．
- 吉田敦彦 1986『縄文土偶の神話学 - 殺害と再生のアーケオロジー -』名著刊行会．

アコリス遺跡における「豊饒の民間信仰」

第1表 アコリス遺跡出土土製ヒト形小像一覧表

番号	全高	全幅	胸部 厚さ	頭部	頭部巻 粘土	頸部	身体部			突起物 (数)	位置	朱線 (数)	溝	出土区	図番号
							胸部	胴部	脚部						
1	7.40	4.94	-	×	?	?	○	○	×	×	×	×	K区		
2	7.83	7.50	-	×	×	?	○	○	○	×	×	×	MK祠堂前		
3	3.66	5.52	-	×	?	?	×	×	○	○	×	×	Tomb18		
4	3.96	2.89	-	×	?	?	○	○	×	○1	腹	×	E区	第6図:4	
5	4.00	3.70	1.00	×	?	?	○	○	×	○1	腹	×	Tomb29		
6	4.45	3.50	-	×	?	?	○	○	○	○1	腹	×	B区		
7	4.95	4.53	-	×	?	?	○	○	○	○1	腹	×	E区		
8	5.03	5.05	-	×	?	○	○	○	×	○1	腹	○2	C区		
9	5.50	4.30	1.20	×	?	?	○	○	○	○1	腹	×	E区	第5図:15	
10	5.58	4.02	-	×	?	?	○	×	×	○1	腹	×	F区		
11	5.65	3.90	1.40	×	?	?	○	○	×	○1	胸	×	J区		
12	5.74	4.76	-	×	?	?	○	○	○	○1	腹	○1	C区		
13	5.78	4.44	-	×	?	○	○	○	○	○1	胸	×	B区		
14	5.81	5.00	-	×	?	?	○	○	○	○1	腹	×	F区	第5図:13	
15	6.15	4.50	-	×	?	?	○	○	×	○1	腹	×	I区		
16	7.25	4.33	1.70	×	?	?	○	○	○	○1	腹	×	J区		
17	7.85	5.89	1.85	×	?	?	○	○	○	○1	股	×	B・C区		
18	7.91	4.69	-	×	×	?	○	○	○	○1	腹	×	Tomb14	第7図:2	
19	5.30	4.32	0.95	×	?	?	○	○	○	○2	腹	×	C区		
20	6.52	3.76	1.30	×	?	?	○	○	○	○2	胸腹	×	B区	第6図:6	
21	6.22	4.01	-	×	?	?	胸部	○	○	○	○4	胸腹肩	×	E区	第6図:8
22	3.25	5.15	-	○	○	○	○	×	×	×	×	×	D区		
23	3.88	4.30	1.19	○	×	○	○	×	×	×	×	×	墓道		
24	4.45	4.58	-	○	○	○	○	×	×	×	○1	×	C区	第5図:3	
25	5.94	4.14	-	○	○	○	○	○	○	×	×	×	D区	第5図:12	
26	7.22	4.24	-	○	○	○	○	○	○	×	×	×	E区	第6図:7	
27	7.45	4.58	1.45	○	○	○	○	○	○	×	×	○	北シャフト		
28	7.91	4.85	1.85	○	○	○	○	○	○	×	×	×	D区		
29	8.35	4.89	-	○	○	○	○	○	○	×	×	×	K区	第6図:2	
30	4.26	3.51	-	○	○	○	○	×	○1	腹	×	×	E・F区		
31	4.88	4.70	1.15	○	○	○	○	×	○1	腹	×	○	D区	第5図:8	
32	5.80	5.14	1.80	○	○	○	○	×	○1	腹	×	×	E区	第5図:1	
33	6.00	4.49	-	○	○	○	○	×	○1	腹	×	×	F区		
34	6.02	4.29	-	○	○	○	○	×	○1	腹	×	○	E区		
35	6.16	3.86	-	○	○	○	○	○	○1	腹	○1	×	K区	第5図:7	
36	6.23	3.34	1.35	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	E区		
37	6.33	3.74	1.45	○	×	○	○	×	○1	腹	×	×	C区	第5図:10	
38	6.58	3.80	-	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	B区	第7図:3	
39	6.88	3.93	-	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	Tomb38	第5図:4	
40	7.10	5.28	-	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	C区	第5図:2	
41	7.35	5.10	1.65	○	○	○	○	○	○1	胸	×	○	ファサード前		
42	7.44	3.80	-	○	×	○	○	×	○1	腹	×	○	F区	第6図:5	
43	7.58	4.32	-	○	○	○	○	○	○1	腹	×	○	D区	第5図:5	
44	7.72	4.55	1.30	○	×	○	○	×	○1	腹	×	○	C区		
45	7.93	4.35	-	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	C区	第5図:9	
46	8.04	4.71	1.91	○	×	○	○	○	○1	腹	×	○	I区	第5図:14	
47	8.08	4.53	1.15	○	○	○	○	○	○1	胸	×	×	D区		
48	8.68	4.87	-	○	○	○	○	○	○1	胸	○3	○	D区		
49	8.70	4.98	1.40	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	D区	第7図:1	
50	8.71	4.92	1.70	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	C区	第7図:5	
51	8.79	4.28	1.58	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	北シャフト		
52	9.00	4.78	1.40	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	Tomb05	第5図:11	
53	9.10	5.50	1.50	○	○	○	○	○	○1	腹	×	×	C区	第5図:6	
54	5.71	3.12	1.45	○	○	○	○	○	○2	胸腹	×	×	MK祠堂前		
55	6.77	4.27	-	○	×	○	○	○	○2	胸腹	×	○	C区	第7図:4	
56	8.20	4.36	-	○	○	○	○	○	○2	胸腹	×	×	C区	第6図:3	
57	8.35	6.35	1.70	○	○	○	○	×	○2	胸腹	○1	○	E区	第6図:1	

Fertility magical practice in Akoris

HANASAKA, Tetsu

This paper focuses on human figurines unearthed at Akoris in Middle Egypt. Precedents have not been examined thus far, and these objects could date back to the period between the Third Intermediate Period and the Late Period. The coarse earthen figurines show no particular physical features, such as breasts or genitals, while they are naked and lack any facial expression, hair and ornaments. A circular projection placed around the torso is the only decoration they carry, and it is also the most highlighted. It might be possible that this projection represents a navel and that the figurines symbolize children, and particularly infants, since in many cases they neither possess protruding navels nor commonly display any gender difference.

Furthermore, it is interesting to note that all the figurines were damaged around the head. In the study of anthropoid figurines of the ancient world, there have been discussions on whether such damage was caused by accident or on purpose. As for the present figurines, it is reasonable to assume that their heads were broken intentionally on the basis of the experimental examination. It could be interpreted that this behaviour, namely breaking the head of a figurine, is a cult-magical/apotropaic act, which would indicate that the figurine was symbolically broken to enact death as a substitute for a child. In addition to hopes for the healthy lives for their children, it may well be that people used the figurines to wish for safe childbirth, abundant harvest and prolificity of livestock.

It is quite likely that the human figurines found at Akoris are one kind of fertility figurine. They would stand for a local magical belief which was not offered to the traditional gods and goddesses of Egyptian myths and royal ideologies. People who once occupied this site seemed to have carried the desire for better earthly fortune in this living world.